

鶴田浩二はイントロが始まると、自嘲気味につぶやく。「古い奴だと思いでしょが、古い奴ほど新しいものを欲しがるのでございます(傷だらけの人生)」。この歌が流行った頃、私は「現代っ子」と呼ばれる少年で、「新しい奴」であった。

八ヶ岳伝道所は教団の中でもっとも新しい教会だが、讃美歌は1954年度版の文語調、長椅子は明治と昭和のもの。「新しい革袋に古いぶどう酒」を入れているため破けることはない(マルコ 2:22)。

新しい教会ほど古いものを大事にするものでございます。

洗礼者ヨハネの弟子やファリサイ派は求道的によく断食していた(2:18a)。また民衆も、疫病や旱魃、喪や悔い改めの際には断食し、真剣に祈るのが常だった。だから人々は非難がましく、イエスに「なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのか(2:18b)」と尋ねた。

問いに対して、イエスは泰然と答える。「花婿と一緒にいるのに、婚礼の客は断食できるだろうか。花婿と一緒にいるかぎり、断食はできない(2:19)」。このケムにまくような答え、イエスらしい。

花婿とはキリスト、婚礼の客は弟子たち。そして「しかし、花婿が奪い取られる時が来る。その日には、彼らは断食することになる(2:20)」と付け加えた。

十字架で花婿が失われると婚礼は終了し客は断食する、という謂だろうか。

洗礼者ヨハネは、救い主を待ち望んで悔い改めを求め、人々に洗礼を授けた(1:3~4)。だから彼の弟子たちは真剣に悔い改め、熱心に断食をした(2:18)。

イエスの弟子たちが断食しないのは、待望する救い主なるイエスが共におり、今は婚礼の真ただ中だから(2:19)。

婚礼は十字架で中断されることになるが(2:20)、神の愛と命が溢れて復活は起こり、キリストの婚礼は永遠に続いていく。

生まれる前からイエスに伴走して来た洗礼者ヨハネ。そしてここで、ヨハネの弟子と、イエスの弟子の違いが明らかになった。前者は、救い主を待ち望む断食。後者は、救い主と共にある婚礼の喜び。

想像力を働かせてこの違いをよく味わってほしい。キリスト者もまた罪人で、悔い改める必要はある。だが何よりも婚礼が先にある。まず愛がたっぷり注がれ、赦しが与えられ、喜びに溢れる。ここが私たちの出発点だ。

救いは、悔い改め、清められたことへの褒賞ではない。厳格な洗礼者ヨハネと、大らかなイエス。人と世が「いかに救われるか」の本質が、こんなイエスの人物像に現れている。

それからイエスは、詩的な寓喩をつぶやく。「新しいぶどう酒を古い革袋に入れたりほしくない。そんなことをすれば、ぶどう酒は革袋を破り、ぶどう酒も革袋もだめになる。新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるものだ(2:22)」。

自分は新しい革袋、新しいぶどう酒だと自負できるだろうか。私はもはや若者ではない。開拓伝道を始めた頃は青年だったが、今や還暦。ああ古びたか、と歎息がもれる。

「このぶどう酒の革袋も酒を詰めたときは真新しかったのですが、御覧ください、破れてしまいました。わたしたちの外套も靴も、はるかな長旅のため、古びてしまいました(ヨシュア 9:13)」。

ハッと気づかされる。古いものは、新しいものと同様、キリストから出て来た命。

真新しさは自ずと古びる。婚礼に招かれている私たちは、古びてしまいがたながら新しくなる。

真新しさは積み重ねられたその表面。



#### 《おまけのひとつ》

老舗おでん屋の汁 鰻屋のたれは つぎ足しつつ使っていると言う 新しい酒は泡立って威勢がいい  
けけど 旨いのは古くて新しい酒 減った分だけ足されて醸される酒 歳月は革袋の酵母となる